大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

書評『グローバル・スタンダードにもとづくソーシャルワーク・プラクティス：価値と理論』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 児島, 亜紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/16035

社会福祉学　第58巻第3号 180-182 2017

書　評

ミネルヴァ書房
判型：A5判
総頁数：236頁
発行年：2016年
定価：3,200円＋税

北島　英治 著

グローバルスタンダードにもとづくソーシャルワーク・プラクティス：価値と理論

大阪府立大学　児島　亜紀子

1. はじめに

筆者の北島英治氏は，長年にわたりソーシャルワークの実践理論やワーカーの専門性について研究してきた．本書は氏の2冊目の単著である．

本書の冒頭には，本書が「ピープルファースト」と「グローバルスタンダード」という二つの視点に沿って書かれたものであることが記されている．本書はかかる二つの視点に立脚した「グローバルスタンダード・ソーシャルワーク」を提唱したものであるが，留意すべきはここにいう「グローバル」が単に地理的な広がりに規定された「世界／国際」ないし「国／地域」という概念ではないという点である．本書は，ひとつの国や地域に規定された「国民」たる「人々（the people）」をソーシャルワークの対象とするのではなく，“the”のつかない生身の人間を対象とする営みとしてソーシャルワークを捉えているといえる．このことの背景には，従来の伝統的福祉国家におけるソーシャルワークが当該福祉国家の構成員たる国民を原則的にその支援対象としてきたのに対し，グローバル化の進展により従来の「自国民」の範疇を超えた―たとえば移民・難民といった「外国人」を含む―他者を積極的に支援対象にすることが要請されているという認識があるものと思われる．「人間の尊重」というカント的理念を価値の基軸に据えるソーシャルワークは，少なくても形式的にはずっと「ピープルファースト」であったはずなので，筆者がこの概念を強調する背景には，前述したような歴史的変化に伴う具体的要請があると推察される．

さて本書の立場，つまりピープルファーストかつグローバルであるということを明確化するために，少し長くなるが本書の「まえがき」を引用したい．筆者によれば，グローバルスタンダートに基づくソーシャルワークとは，「この『世（よ）（界）』に『命（いのち）』を得て，その生（せい）を受けたすべての「人」「人々」が本来の自分の内なる「人間」に立ち返り，その人間としての「存在」（Being），そして，そのすべての“「（人間）存在」が尊重され（人間の尊厳／人権〔Human Dignity/Human Rights〕）”，この「世（よ）（界）」の中のすべての人々からなる“「社会」の正義”（Social Justice）の実現を目指し，すべての「（人間）存在」が良きもの（Well-being）であることを使命とする専門職としての共通基盤（common base）と，それを原則・価値（principle/values）とする」ものとされる（iii頁）．

2. 本書の構成と概要

本書は「ソーシャルワーク・プラクティスの基盤」と題する第Ⅰ部と，「ソーシャルワーク・プラクティスを発展させた主な理論」について論じる第Ⅱ部からなる．

第Ⅰ部には三つの章が置かれ，各章ではソーシャルワークの専門性，「プラクティス」の意味内容やその理論的展開が述べられる．初学者にもソーシャルワークの全体像を掴み取ってもらうというねらいか，第1章の冒頭ではソーシャルワーカーがどこでどのように働いているのかが具体的に示され，そののちソーシャルワークの定義や原理の説明へと進む．また，ソーシャルワークのグ

ローバルスタンダードとは何かという問題が提示され，IFSWとIASSWが提出した公式文書①ソーシャルワークにおける倫理・原則の表明（2004年）②グローバルスタンダード（2004年）③グローバルアジェンダ（2012年）④ソーシャルワークのグローバル定義（2014年）が説明される．ことに本書のタイトルにもなっている「グローバルスタンダード」概念にかかわる②は詳述される．ちなみにこの章にいう「グローバルスタンダード」とは，グローバル化が進む世界的な潮流において「ソーシャルワーク」「ソーシャルワーカー」とは何かを問うものであり，IASSWとIFSWの合同会議によって定められた三つの項目，すなわち①ソーシャルワークのグローバル定義②ソーシャルワークの基本目的③ソーシャルワーク専門性の教育と訓練のためのグローバルスタンダードを指すものとされる（15頁）．

第2章では「過程／方法」としてのソーシャルワーク・プラクティスの統合過程と理論的発展，ソーシャルワーク・プラクティスの対象，近年のソーシャルワーク（プラクティス）理論の紹介がなされる．章のはじめにリッチモンド，パールマン，コノプカ，ロス，バートレットといったいわば「古典」が参照され，ジェネラリストとしてのソーシャルワーカー像が確立していくさまが記述される．さらにアップルビー（Appleby）に依拠し，近年ソーシャルワーク・プラクティスの利用者像が従来の「○○ができない人」という捉え方から「○○ができる人」という捉え方（Ableism）へと変化してきたことが強調される（61頁）．かような利用者像の変化は，本書の基本的な視点とされる「ピープルファースト」概念と通底するものであろう．また，第2章では「国の福祉制度や社会サービスの対象になりえる人」（65頁）から，グローバル化によって「ソーシャルワーカーの専門性である，専門価値，専門機能，専門知識，専門技術に基づくソーシャルワーク・プラクティスの対象」（65頁）へ（つまり「国民」から“the”をはずした“people”へ）ワーカー自身の視点を移していくことの重要性が記述される．

第3章では「“ソーシャルワーク・プラクティス”についての“知（識）”について議論」（100頁）が展開される．筆者が着目するのは，「モダンとポスト・モダン」に関する議論である．取り上げられるのはオクタイ（Oktay）による「3つの理念型」，すなわち「ポジティビスト（positivist）」「コンストラクティビスト（constructivist）」「プラグマティスト（pragmatist）」という3類型である．これらはいずれもソーシャルワークの理論および実践に対応していることが示される．このうちポジティビストはリッチモンドによる『社会診断』，のちの「診断主義ケースワーク」のような「医学モデル」の立場を示し，プラグマティストは「機能主義ケースワーク」と親和的であるとされる（103頁）．一方コンストラクティビストはポスト・モダンなソーシャルワーク・プラクティスの発展に大きな影響を与えたとされる（103頁）．また，この章ではこれまで主流であったソーシャルワークのシステム視点やエコロジカル視点に対する批判が提示される．さらに筆者はムラリー（Mullaly）を引きつつ，システム理論やエコシステム，生活モデルやストレングス視点に立脚する「従来的（conventional）ソーシャルワーク」と，フェミニストソーシャルワークや急進的（radical）ソーシャルワーク，構造主義ソーシャルワークなど社会変革を前面に打ち出す立場である「革新的（progressive）ソーシャルワーク」を対比させ，後者の立場が2000年代に発展してきたとする．加えて，2000年以降の新たな理論的動向として，個人問題の根本には社会構造の問題があると捉える「新構造的」ソーシャルワークに言及する（110頁）．

第Ⅱ部「ソーシャルワーク・プラクティスを発展させた主な理論」は，三つの章から構成される．まず「構造的ソーシャルワーク・プラクティス理論」としてルンディ（Lundy）の理論が紹介され

る．ルンディの構造的アプローチは，個人の問題の原因が個人にあるのではなく社会の側にあるとする「新構造主義」（116頁）アプローチとその基底的な問題関心を共有するものの，構造的ソーシャルワークが社会構造に働きかけて問題解決を図ろうとするのとは異なり，「ソーシャルワーカーが提供するプラクティスや援助は，個別的レベル（individual level）のものであり，「個人的」なもの」（116頁）と認識されていることが示される．筆者はこれを「「構造的」であることと，「構成的」であることの調和を図ろうとしている」と捉える（117頁）．

続く第5章で筆者はハウ（Howe）を参照し，「急進的（radical）ソーシャルワーク」「批判的（critical）ソーシャルワーク」について取り上げている（147頁）．ハウが「パーソン・センタード・アプローチ」を「ポスト・モダン」の視点から取り上げていることや，「批判的ソーシャルワーク」と「熟考的／省察的実践」の結びつきが述べられる．

最後の第6章においてペイン（Paynen），グリーン（Green），ターナー（Turner）らの著作が取り上げられる．各論者がどのようなソーシャルワーク・プラクティス理論を論じているのか，原文を抜粋しながら紹介される．

3．本書の特徴と課題

本書は，主として北米を念頭に，ソーシャルワーク・プラクティス理論の近年の動向を「モダンとポスト・モダン」を準拠枠として概観したものといえる．本書は狭義のソーシャルワーク理論だけでなく，ソーシャルワークの価値や理念への言及，実践のガイドラインの紹介，事例などが随所に盛り込まれており，それゆえやや論点が拡散した感は否めない．取り上げられた理論も網羅的であり，理論同士の関係や位置づけが必ずしも整理されていないことは惜しまれる．

また，筆者がソーシャルワーク・プラクティス理論において2000年以降に起こった変化として記述するいくつかのものには，すでに勃興して久しい理論が含まれている．たとえば「革新的ソーシャルワーク」（107頁）に分類される急進的（radical）ソーシャルワークは，少なくとも英国では1970年代に盛り上がりを見せているし，フェミニストソーシャルワークについても，ドミネリらによる同名の著書が1989年には刊行されている．これらの理論が「批判的（critical）ソーシャルワーク」と同様に2000年以降発展したものと見るのは正確さに欠けるのではあるまいか．それとも筆者は，社会変革を前面に押し出す「革新的ソーシャルワーク」に含まれる一群の理論が，2000年以降「再評価」されているということを述べたかったのだろうか．

このほか，ポスト・モダンの視点に立つソーシャルワーク・プラクティス理論は押しなべて「ピープルファースト」の視点と親和的であるといえるのか，ルンディは「構造的」なものと「構成的」なものの調和を図ることにはたして成功したのか，またこの両者の調和を図ることはソーシャルワーク理論上どのような意義を有するのかなど，今後掘り下げるべき重要な論点がいくつか見いだされた．

ソーシャルワーク理論を幅広く学びたいという学習者にとって，原文が併記してある本書が非常に役立つことは間違いないだろう．その一方，本書を理論にかんする研究書として見ると個々の理論に対する批判や吟味という点で若干不満が残る．

しかしながらソーシャルワーク・プラクティス理論が新しい段階に入ったことを示唆する本書の問題意識には共感できる部分も多い．ソーシャルワークに対する筆者の情熱が随所に感じられる一冊である．